

日本人だけが知らない世界の常識

第三話 男女の礼儀編（前編）

海外へ行き、ちょっとした恋愛をする人もいるでしょう。留学生ばかり、旅人ばかり、駐在員ばかり。昔から、「その国の言葉や文化を学びたければ、現地で恋人をつくれ」と言われているように、異文化交流に恋愛は最適です。特に若い人には、是非たくさん恋愛をしてみたいものです。

ただ、中にはあまりに多く恋をしすぎたり、不倫などアブノーマルな方向へ突っ走ったりしてしまう日本人もいるようです。特に日本で欲求を抑圧されてきた人たちは、海外へ行ったら爆発してしまうことがあるといえます。

日本の企業の中には、こうしたことを憂慮して、海外の支社に駐在員を派遣する時「現地の女性にはまっとうなお金を買いだりしないように」と、任期を二年とか三年に決めて、監視役のお手伝いさんやドライバーをつけるところもあるとか、ないとか。企業戦士は、仕事にだけ熱くなっていればいい、ということなのでしょう。

とはいえ、大人の男と女が異国の地で巡り会えば、何も起きない方がおかしいですよ。ね。好むと好まざるとにかかわらず、甘いムードにならざるを得ないことだってあるでしょう。ただ、感情と感情、肉体と肉体とがぶつかり合う男女交際は、すべてが円滑に進むとは限りません。文化の違い、考え方の違いなどから、時には血を見ることもあります。

そんなことを回避すべく、ここでは、恋愛における異文化の違いを重点的に考えていくことにしましょう。

【Hなブラブラ】

日本人女性の穂乃花さん（二四歳）が、夏休みを利用してドイツへ旅行に行った。

彼女は観光はせず、お店を回って気に入った服や靴を買って、映画館を訪れたりしていた。

言葉はわからなかったが、心地いい椅子にすわり、映画館の雰囲気を感じているのが楽しかった。

その日も、彼女は買い物帰りに映画館に立ち寄り、椅子にすわって映画を見ていた。クーラーがうまく効いておらず、暑かったため、ピンクのミニールを脱ぎ、足を組んでゆっくりしていた。すると、隣の椅子の男性が声をかけてきた。

「なあ、あんた、いくらだ？」

どうやら売春婦と間違えられたようだ。彼女は内心「失礼だわ」と思いながら拒絶した。男は首を傾げて去っていった。

しばらくして、後ろの席の男性が近づいてきて、同じことを訊いた。彼女は同じように追い払った。心なしか、周りの男性客たち誰もが鼻の下を伸ばして、ジロジロと見ている気がする。ドイツ人は紳士だと聞いていたのに、どういつことなのだろう。

その時、彼女の肩を誰かが叩いた。ふり返ると、映画館の従業員が立っていた。彼は申

し訳なさそうに言った。

「ここで売春をされては困ります。すみませんが、出て行っていただけないでしょうか」
彼女は怒って立ち上がった。

「何を失礼なこと言っているの？ 私は売春婦じゃないわ。ただの客じゃない！」

「でも、今その仕草をしていたじゃないですか。裸足になって足をブラブラさせて誘っていたでしょ」

彼女はようやく自分が勘違いされていることに気がついた。彼女は日本にいた時と同じように、ミニールを脱いで足を組んでブラブラさせていただけだ。だが、この国では外で靴を脱ぐ習慣はなく、靴を脱いで足を動かしていれば、売春婦が誘っているように見えてしまうのだ。彼女は知らず知らずのうちに、客を招いていたのである。

日本には部屋の中で靴を脱ぐ習慣があるため、外で靴を脱ぐことに特別な意味はありません。夏ともなれば、街頭や店先で靴を足先にひっかけて、けだるそうにブラブラさせている光景を目にします。

しかし、欧米では靴を脱ぐのは寝室のみです。そのため、靴を脱ぐことが、性的なことを匂わせる仕草の一つになってしまふのです。この女性が映画館で靴を脱いで、素足を揺らしていたのを見て、現地の人たちは「売春の誘い」と受け取ってしまったのでしょ。

靴を脱ぐことが性的な合図になるという誤解は、カップルの間でもあるようです。
私の知り合いの日本人女性がアメリカに留学したときのことです。ある日、彼女は付き合いはじめたばかりのアメリカ人男性をアパートに誘い、手作りのご飯でもてなしました。女性が無意識のうちに靴を脱いだところ、男性が助平な顔をし、ガバツと抱きついて胸を触ってきました。彼女は抵抗して言いました。

「ちよつと待って。まだ付き合って二日しか経ってないじゃない！ 早いわよ」
すると、男性は呆気にとられた顔をして、こつ答えたそうです。

「え？ だって、君から俺を誘ったじゃないか。なんで断るんだよ」

この男性は、彼女が靴を脱いだのを見て、性的な誘惑を受けたと考えたのです。靴を履く文化の中で育った彼には、女性が靴を脱ぐことがセックスのお誘いのように感じられたのでしょ。

ちなみに、こうした誤解が生じるのは、欧米や南米、それにアフリカです。いずれも、部屋の中で靴を履く習慣がある国々です。アジアや中東では室内では靴を脱ぐので、変な誤解をされる心配はありません。

もっとも、こうした国々では靴とは関係なく、女性が一人で映画を見に出かけたり、男と二人きりになったりした時点で「売春婦」と見なされてしまいます。実は、性的に自由だと思われがちなタイやベトナムといった東南アジアの国々も、日本よりずっと貞操観念が強いので、そういう誤解が生まれがちです。誘われたくないのならば、現地の習慣には十分気を付けるべきでしょね。

これとは別に、口の動かし方で、性的な誤解を招いた例もあります。

同じ女性から聞いたのですが、考え事をする時、口の中で舌を動かす癖を持つ日本人留学生の女性がいたそうです。たまにいますよね。舌で頬を膨らませるような仕草です。大学の試験期間中、彼女はアメリカ人の彼氏と一緒に勉強をしていて、何気なくその仕草を

したところ、彼氏が急にズボンを下ろして股間を出したのです。彼女は意味がわからず、尋ねました。

「一体どうしたの？」

男性はこう答えました。

「は？ 何言ってるんだよ。舐めてくれるんだろ？」

国によっては、口の中で舌を転がしたり、頬を舌で押ししたりするのは、「オーラルセックス」を意味する仕草になってしまいます。彼女の仕草に、男性は早とちりしたのです。試験期間とはいえ、世の中の男が考えることは、どこでもあまり変わらないようですね。

【バスの激痛】

昌代は大学に入学後、アラビア語を勉強しはじめた。中東の文化に興味があったわけではないのだが、なんとなく誰もできない言葉を勉強したいと思い、アラビア語を選んだのである。

語学の才能があったのだろう、昌代のアラビア語は瞬間に上達していった。そして、大学二年の時には、中東のヨルダンという国に留学することになった。奨学金によって一年間無償で勉強ができることになったのだ。

ヨルダンでの学生生活は、想像していたより気楽だった。イスラム教の国だが、それほど厳しくなく、女性が一人で歩き回ったり、買い物をしたりすることが許される環境だったのだ。昌代は休みの度にバスに乗り、地方の田舎町を旅しようと決めた。

ある日、彼女は旅行に出かけようとバスに乗った。しばらくすると、突然胸に激痛が走った。肉を抉り取られるような痛みがあったのだ。頭の中が真っ白になり、とにかくバスを降りた。ズキンズキンという痛みがある。とりあえず、その日は旅行をやめ、宿泊先に帰って休むことにした。

翌週、昌代は気を取り直して、再びバスに乗って旅に出た。すると、今度は胸とお尻に激痛が走った。彼女は「うぎゃ！」と叫び、床に倒れこんだ。あまりの痛さに立っていることができなかつたのだ。彼女は次の停留所で這うようにしてバスを降りた。同じバス停で降りた現地の女性が心配して近づいてきた。

「どうしたの？ 何か病気？」

女子大生は起きたことをあがままに話した。すると、現地の女性はこう言った。

「それは、痴漢よ。痛みがあったところを見てもらんなさい」

女子大生は洋服の下をのぞいてみた。すると、胸やお尻に真っ赤な痕がついている。

現地の女性は言った。

「この国の男性は痴漢のやり方を知らないのよ。とにかく、乳房でもお尻でも、思い切りつかめばいいと思っているの。特に日本人は『痴漢をされても黙っている民族』と思われるから、よく被害にあっているわ。バスに乗った時は、男性の傍に寄らないのがベストよ」

日本では痴漢は撫でるように胸やお尻を触るのが普通だ。しかし、中東の男性は力いっぱい握りしめてくるのである。性的な情報が少ないために知識が乏しく、「女性と見たら色っぽい箇所を力いっぱいつかめばいいだろう」と勘違いしているか、衝動に任せてめいっぱい握りしめるのである。

その後、昌代は何度かバスに乗ったが、いずれも同じような痴漢に遭遇した。以来、彼女はバスに乗ることが怖くなり、一度も旅行に出かけぬまま留学生生活を終えることになってしまった。

外国人の中には、日本では痴漢が日常的に行われていると考える人たちがいます。その認識が正しいかどうかは別にして、日本は「痴漢大国」だと考えられているのです。この背景には、二つの要素があります。

一つは、実際に痴漢が行われているという報道や噂があるということです。日本の痴漢犯罪は、欧米に比べてかなり多いと言われています。そのため、海外メディアが日本を紹介する際、アニメや電車の中の居眠りと並んで、痴漢を取り上げることがあるのです。それで外国人の中には、日本を痴漢犯罪が当たり前のように行われている国だと考える人がいるのです。

二つ目が、外国人の持つ日本人女性への固定観念です。外国人の多くは、「日本人女性はおとなしい」という固定観念を抱いています。そういう彼らにとって、「痴漢をされても何も言わず、終点まで我慢している女性」というのは、典型的な日本人女性像なのです。そうしたことから、現実以上に痴漢大国のイメージが膨らんでしまっているといえるでしょう。

このような偏見を抱いている外国人にとって、日本人は「カモ」です。彼らの中には、女性の体を触ってみたいけれど、自分たちの国の女性を触ると問題になると思って我慢している人たちがいます。そこで、町で日本人を見かけた時、「日本人なら抵抗しないだろう」と考えて、痴漢行為を働くのです。これが、外国で日本人が痴漢にあいやすい原因の一つなのです。

ところが、ここでトラブルが生じます。彼らはやり方を知りません。日本人の痴漢のようにバレないようにそっと触るのではなく、欲望のままに力いっぱいギュッと握りしめるのです。日本人女性が痛みにびびくりして飛び上がるのは当然ですよね。被害者はみな「最初は何か挟まったか、刺さったのかと思った」と口をそろえています。そこまでの痛みだそうです。

ここで紹介した話は中東が舞台ですが、インドも勝るとも劣らぬ痴漢大国です。日本人女性旅行者の間では、「インドこそ痴漢大国」という噂すらあるほどです。インドのバスや電車はどこもひどく混雑しており、そこで胸をつよく握られたり、つままれたりするので、痴漢というのは、混雑があっただけで行われるものなのかもしれません。逆にいえば、混雑する空間がない国では、痴漢犯罪はかなり少なくなるのです。

『それでもボクはやってない』という痴漢冤罪をテーマにした映画をご存知でしょうか。『Shall we ダンス?』の周防正行監督がメガホンを取り、二〇〇七年に公開されました。この作品は反響を呼び、海外でも上映されたのですが、欧米の観客にとっては痴漢犯罪そのものが目新しく、面白いことに、受け止め方や笑いのツボが日本人のそれとはまったく違っていたそうです。国によっては、痴漢というのはそこまで縁のない犯罪なのです。

そうそう、余談ですが、日本の女性に向けてつくられる官能小説の中では、なぜか「痴漢モノ」の人气が高いそうです。むしろ、日本人女性が痴漢をされたいと願っているわけではありません。現実にもそう考えている女性はほとんどいないはずですが、なぜ女性

は「痴漢モノ」の官能小説を買うのか。その専門の編集者によれば、「背徳感」がポイントなのだそうです。

女性は「背徳感」の中での性行為」に対して想像を逞しくする傾向にあるといえます。それゆえ、女性向けの官能小説は、背徳感のあるもの、つまり、「学校で先生と……」とか「車の中でボーイフレンド数人と……」という禁断をテーマにした状況設定ほど好まれるというのです。「痴漢モノ」も、そうした延長線で人気のあるテーマなのだから。

とはいえ、現実には女性が痴漢を求めているわけではありませんし、痴漢が犯罪行為であることも違いありません。外国人男性も、日本男性人も、くれぐれも、そうした愚かな行為はしないようにしていただきたいと思えます。

【暗黒のパンティー】

ミャンマーには、穏やかな人が多い。東南アジアでも、ひと際やさしく親切な人が多いと思えるほどだ。そのため、日本人旅行者の中には、ミャンマーにはまり、通いつめる人もいる。

旅好きの美和さん（三四歳）も、そんな一人だった。夏と冬の休暇には、最低でも五日はミャンマーに滞在していた。現地に友人もでき、やがては恋人もできた。五歳年下のミャンマー人だ。

ある年の夏、美和さんは一週間の休みをもらい、ミャンマーへ飛んだ。恋人は奥手で、一年付き合ったが、未だにセックスをしていなかった。美和さんは東京で高価な勝負下着を買い、「今回こそは！」と決意して機上の人となった。

到着した夜、二人はホテルのレストランで食事し、そのまま部屋に入った。美和さんはドアを閉めると恋人の肩に手を回して熱いキスをした。彼氏の方もその気になったらしく、激しいキスを返してくる。

美和さんは自らベッドに誘い、その場で服を脱ぎ、真っ赤な下着一枚になった。そして彼氏の腕をつかんで、下着の中に導こうとした。すると、彼氏が突然絶叫し、離れようとした。美和さんは何が起きたのかわからず、もう一度彼の手をつかみ、下着に差し入れた。彼は蒼ざめ、美和さんを床に突き倒した。

「やめる！ 何するんだ！」

意味がわからなかった。美和さんは下着姿のまま言った。

「今から愛し合いたいだけよ。何も怖いことはないわ」

「ふざけんな！ 俺の将来を台無しにするつもりか！」

彼氏はそう叫ぶと、服を着てホテルの部屋から出て行ってしまった。下着姿の美和さんだけが取り残された。

後日、美和さんは現地の仲のいい女性にこのことを相談した。彼が怒っているのはわかった。だが、一体自分の何が悪かったのかわからなかったのだ。友人の女性は話を聞いた途端に笑い、こう言った。

「ミャンマー人の男性に下着を触らせたならダメよ。彼らは女性の下着に触るとすべての運がつきると信じているの。だから、セックスをする時は、女性が丸裸になってからしなきゃならないの」

美和さんは、恋人を挑発しようとして下着の中に手を入れさせた。彼氏はそれで激怒し

たのだろう。

その後、彼の怒りは覚めやらず、結局この恋は失敗に終わってしまった。

ミャンマーにはいくつもの民族があるのですが、その一部では、男性が女性の下着に触れることがタブー視されています。そういう男性と接する女性は、はじめから下着をつけなかつたり、自分からすべて脱いだりしてことを行います。男尊女卑の考えが根強く、下着にこそ女性のケガレが集まっていると考えられているのでしょ。

似たような話ですと、洗濯の際に、男性と女性の下着を一緒に洗ってはいけないという言い伝えもあります。女性の下着についたケガレが、男性のそれにつくことを恐れているのです。従って、田舎などでは、男性と女性の下着を分けて、バラバラに川へ運んで洗濯することがあります。極端な男性の中には、下着を見ただけで悪いことが起きると考える人もおり、洗った下着を物干し竿にかけるのを禁じたりもします。

この風習に基づいて、ある政治運動が行われたことがあります。

ミャンマーという国は、軍事政権による独裁的な統治が長らく行われています。軍人たちが全権力を握り、少数民族や政治犯などを弾圧しているのです。民主化運動の指導者であるアウンサンスーチー女史が長らく軟禁されていることも知られています。

弾圧を受けた人々の中には、国を捨てて隣国で暮らす人も大勢います。彼らは軍事政権の解散と民主化を求めて、政治的グループをつくって運動をくり広げています。

二〇〇七年、タイのそんなグループの一つが、世界の人たちにある政治運動を呼びかけました。それは「世界各国にあるミャンマー大使館に、下着を送りつけよう」というものでした。

この時、民主化運動グループは次のような声明を出しました。

「ミャンマー軍事政権は残忍だけでなく迷信深い。彼らは女性の下着に触れると力を奪われると信じている」

つまり、大使館員に下着を送りつけることで、軍事政権の力をそいでしまおうとしたのです。実際、いくつかの国では、呼びかけに応じてパンティーが送りつけられたとか（AFP「二〇〇七年一〇月二七日付」）。

大使館に勤める外務官も、大量のパンティーが次々に送られてきたら困りますよね。あの意味、効果のある運動だと言えるかもしれません。